

能楽雑感から その9

仕舞のヒント

～ 仕舞のヒント (1) 初めに ～

白謡会のみならず色々な舞台で素人の仕舞を拝見して、もう少しどうにかならないものかと考えたり、自分だったらこうしたいのにと思ったりすることが、積もり積もっています。(かくあるべきと思っても、いざ我がことになると、必ずしも実行が伴わない嫌いはありますが。)

一人よがりであるとは思ふものの、50年の歳月の仕舞経験から得たものとして、書き残しておくことはあながち無意味でもあるまいと考えて、思いつくままに書いてみたいと思い立ちました。

過去に、小欄で書いたことの繰り返しもあることと思いますがご容赦下さい。

以下、明日以降に・・・

～ 仕舞のヒント (2) 切戸口の前で ～

自分の経験で言えば、舞であれ、謡であれ、舞台上上がったときには緊張してはなりません。全ての舞台芸術がそうであるように、能においても、舞台上でリラックスしながら演技することはあり得ません。

故に、舞台上舞っているときに、扇を持つ手が僅かに震えるのは良しとされています。(目障りなくらいに震えるプロもおりますが、これは論外・・・)

しかしながら、緊張のあまり頭が真っ白になって、謡や形を忘れてしまつては元も子もないと言うものです。緊張感を維持しながらも冷製沈着に舞わなくてはなりません。

そこで、舞台上上がる前に色々なことをすることになります。

目を固く閉じて、何やら祈るようにしている人もあれば、せかせかと歩き回る人もおり、泥縄をさらけ出して、一心不乱に形付けに見入る人もいます。

私はかつて、先輩の忠告に従って、左手のひらに「人」と言う文字を指でなぞって、それを舐めることをしたことがあります。汗をかいている手のひらは、ちょっとしょっぱくて、気分転換の効果が無い訳ではありませんでした。

深呼吸が効果的と言う人が多いようです。

最近の私は、舞台上上がる直前に、「ふーっ」と大きく息を吐きます。これは、野球の試合でピッチャーがボールを投げるときに良くやる仕草を真似たものです。

本音を言えば、プロレスラーがリングに上がる時のように、バシバシと胸を叩くとか、両腕を勢いよく振り回したいところですが、ま、場所柄も考えなくてはなりませんので・・・。

～ 仕舞のヒント (3) 切戸口から謡い出しまで ～

切戸口から舞台に出るときは、左足を滑り出すように前に出して、頭をぶつけないように注意しながら、扇を左手で支え、これを水平に保ちながら、腰を十分にかがめて進み出なくてはなりません。

そのあと、正規の作法では、横板に一旦着座して、出番が来たら、おもむろに舞台上上がるのですが、白謡会では、切戸口から出たら、直ちに大小前に進んで、下居する場所に到達しなくて

はなりません。

この時の、心得としては、足許を見ながら陰気に登場してはならないことは勿論ですが、さりとて、三番目物の舞をするのに、肩を怒らし、天下人のように威風堂々と、というのも困ります。

あくまでも、沈着冷静、粛々と、しかし、心中、舞台と見所を睥睨しながら、出なくてはなりません。(理屈としては、そうではありますが、なかなか実行が伴いません)

仕舞は、定位置について謡い始めるときから始まるのではなくて切戸口から出た時から始まると心得るべきです。

～ 仕舞のヒント (4) 下居の場所決め ～

白謡会のスタイル(略式)で、切戸口から、舞始めるところまで行き着くことが、易しいようで、実は、かなり難しいようです。何故か分かりませんが、概ね、中心線よりも手前に位置決めしてしまう人が多いように思います。

松の絵の頂点とか、地謡の人の頭が目安の一つにははなりますが、これらを見つめながら登場する訳には行ける訳でもありません。(松の頂点が中心とは限りません)

しかし、人間の視野は結構広くて、概ね前面の上下左右 180 度、少なくとも 160 度の範囲内であれば見る事が可能ですから、顔は正面に向かっている、意識的に視野を広くとれば、下居の位置決めはそれほど困ることはありません。

但し、視野を広くするには、ちょっとした訓練が必要かも知れません。私は、高校生時代に剣道を少しばかりやっていましたが、剣道の心得としても、視野の拡大は必要でしたので、以下のような指導を受けました。

仕舞の場合も同じですので、紹介しておきます。

先ず両手の人差し指を一本、顔の前に垂直になるように立てます。最初は左右の指をそろえておき、指を見ながらだんだん横に離して行き、最後は両耳の近くまで近づけます。

指の動き(軌跡)を上から見るとアルファベットのUをひっくり返した形、両指を耳に近づけた姿を真横から見ると、Wのような形です。

こうした指の動きを何回も繰り返していけば、だんだんと仕舞の目線が出来上がっていくと思います。

いずれにしても、謡い出しの下居の位置をきちんと決めることが、舞に備えての精神の安定に役立つことは間違いありません。

～ 仕舞のヒント (5) 謡い出し ～

もう 50 年も以前のようですが、さる大家と呼ばれていた能楽師が、能を舞っている途中で絶句しました。しかし、地頭や後見はそれに気付かなかったのか、助け舟を出そうとしません。

そこでその大家はやおら地頭の方に振り向いて「何だ?」と大きな声をかけました。当時、ちょっと話題になった珍風景です。

仕舞の場合も、緊張して舞台上に上がるせいか、舞の構えをして、一くさり謡い出そうとすると、それが出てこないという悪夢のような経験は良くあります。私自身も何回かあります。

何度も繰り返して覚え完全に暗記した筈なのに、日頃の稽古のときは一度も度忘れしたことなどないのに、本番で舞台に出た途端にそれを忘れてしまう・・・舞台には魔物が住んでいると言

われていますから、油断できません。

そのような危機に備えて、手の甲あたりに、マジックで謠いだしの文句を書いておく人がいますが、これはあまりお勧め出来ません。手の汚れは見所からも見えますし、手許を覗き込むと、下居の構えの姿勢が崩れてしまうからです。

謠が出てこなかったら、とにかく焦らずに、泰然と構えて（勿論、困ったような表情は出さない）、地頭が助け舟を出してくれるのを待つべきでありましょう。

(以下、投稿次第追加予定)

